

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2010年10月05日

派遣者氏名（専門分野）	田 由甲	（ 文化形態論 東洋史学 ）
-------------	------	----------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	近世、福建地域における信仰領域の実地調査と史料収集 ——地方政府と基層社会の間に有りて——
-------	--

派遣期間

2010年09月13日 ～ 2010年10月01日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	中国	福州市	福建師範大学	
		福州市	福建省図書館	
		アモイ市	アモイ大学	陳支平
		晋江市安海鎮	(フィールドワーク)	黄真真

派遣先で実施した研究内容

今回の派遣は、明清時期(14c~20c)に亘って、「境」という福建東南沿海部にしか存在しない祭祀圏の実態を探るために、福建現地で文献調査およびフィールドワークを実施したものである。

【文献調査】

1. 福建省図書館

「境」の確認が既にできた福建省福州市における六つの「境廟」の財産管理録『対於六境廟参保管委員会之希望』(民国・施景琛著)を閲覧・撮影した。また、昭和12年に福州の日本学校で校長を務めていた野上英一氏の著書『福州考』を閲覧・撮影した。『福州考』には、当時福州における民間宗教の寺・廟や民俗が詳しく記録されている。

2. 福建師範大学

福建沿海地域における鎮・郷・村(行政末端)が自費出版した地方志を閲覧・撮影。なお、それらはすべて内部発行のもので、寄贈の形のみで流通している。今回、収集したのは、安海鎮の歴史を示す『安平志校注本』・『安海志』・『風雨如磐話安海』、霞浦県の歴史を示す『霞浦文史資料』シリーズ、および地名の変化を記録した『福州市地名志』・『福州市地名録』・『晋江県地名録』・『福州市郊区志』を閲覧・撮影した。

3. 滴水齋(安海鎮蔵書家曾華衡の書齋)

安海鎮でフィールドワークを行う時に、現地の民間蔵書家である曾華衡を紹介してもらった。曾華衡氏の家族は、長年現地で地方資料、特に宗教関係・族譜関係の文献を収集している。氏の書齋で、『泉州道教』・『嘉慶赤店郷土志』・『朱里曾氏存稿資料』・『鑑湖張氏宗譜』・『福里曾氏房譜』・『晋江燕支吳氏家譜』・『安平朱里曾氏存稿』・『泉州回族譜牒資料選編』を閲覧・撮影した。

【フィールドワーク】

1. 福州の伝統街づくり「三坊七巷」を見学し、そのところに現存する境の遺跡「甘液境」を調査・撮影。

2. 安海鎮安平橋の水心亭で、中秋節に行われる鎮の伝統行事「博餅」を実体験。
3. 晋江市安海鎮で、現存する「尚賢境」・「霽雲境」・「城隍境」・「當興境」・「新拱北境」・「靖西境」・「鰲頭境」・「西河境」・「明義境」・「朝天境」・「三公境」・「賢佐境」・「源泉境」の廟で、それらの主神・副神・碑文・管轄範囲などについて調査。
4. 晋江市安海鎮で、「鰲頭境」に住む古老陳詩亮にインタビュー。
5. 晋江市安海鎮で、「境」の順番と地位を表す民間行事「採蓮」のリーダーシップ顔為民にインタビュー。
6. 晋江市安海鎮新店村で、南宋時代の寺「青梅庵」の遺跡と景観を見学・調査。
7. 晋江市安海鎮で、曾華衡氏とともに、龍山寺を見学、住職とお話。
8. 晋江市安海鎮で高氏家廟・顔氏家廟・施氏家廟などを見学。また、顔氏宗族の族長にインタビューし、族譜を拝見。
9. 泉州市で、宗教施設である開元寺・城隍廟・文廟・清淨寺を見学。また、泉州博物館・閩台縁博物館を見学。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

### 1. 「境」の残存状況を調べ、現地調査が可能な地域を選出

本派遣で、福州市・泉州市・アモイ市・安海鎮など、幾つか史料上で「境」の存在が確認できたところに赴き、「境」の残存状況、つまり「境廟」の有無、祭祀範囲の現存状況などを確認した。その結果、近代化や都市開発などの影響で、福州市・泉州市・アモイ市などの都市部では、「境廟」が殆ど取り壊され、また、人口移動も激しいため、元来の「境」を窺うことは困難。それに対し、現在、安海鎮の経済はまだ十分発展していないため、従来町並みが残り、現地調査の最適な対象になった。

### 2. 明清時期における安海の「境」

安海鎮には、数十個の「境」が存在する。従来、居住ブロックを封鎖できる幾つかの「隘門」が設置されていたため、「境」には、明確な範囲が存在する。一つの「境」には、一つの「境廟」があり、該当「境」の住民がその主神（境主公）を祭る。「境廟」には独立な財産があり、「境」と「境」の間に、金銭的な受贈はしない。しかし、これらの「境」の中に、「霽雲境」は特別な高い地位を有する。例えば、「採蓮」という伝統行事を行う時に、先頭に位置し、全安海鎮で寄付金を募集する権利がある。その理由として、「霽雲境」は「都主公」（元代から、安海鎮は行政上「八都」と呼ばれていた）を祭る場所が挙げられる。「都主公」は「境主公」より偉いし、また管轄範囲も全鎮に及ぶ。したがって、「霽雲境」が伝統行事を行う時には、ほかの「境」から金銭的な支援をもらう権利がある。

### 3. ケーススタディで、基層社会の構造と漢人社会の秩序を復元

まず、「都主公」は文献に見当たらない。それを民衆的な造神行為と考えられる。安海の「都主公」は玄天上帝で、これは水を掌る神様である。史料を見れば分かるように、明清時代の安海は沿海部に位置する豊かな商業町で、頻繁に海賊行為が発生するところでもあった。商売に出かける家族と現地の治安をまめるために、玄天上帝が「都主公」として選ばれ、鎮全体の安全を見守る神と祭られた。

さらに、「都主公」の出現から、県より小さい、「境」より大きい単位が、基層社会の管理に欲しがったことが言える。「境主廟」と「都主廟」が普段やっている慈善事業も、地方政府の力が及んでいないところで、このような中間組織がローカルを管理する実態を表現している。また、ローカルに存在する秩序も、行事中の順番や特権などの形で表されている。例えば、有力宗族は「境廟」に多く寄付することで実力を表現し、地域に対する指導力を保つ。

また、「境主公」の管轄範囲と「都主公」の管轄範囲が明確にさている。その理由は、従来、居住ブロックごとに、幾つかの「隘門」が設置され、夜になると閉められ、強盗や海賊の防止策として取り入れられている。このような境界が安全面で強く機能した結果、「境」の範囲、つまり、「境主公」が神力を発揮する範囲も明らかになっていた。

要するに、安海鎮における「境」と「都主公」の形成には、地域自衛の目的が色濃く存在しているといえる。また、基層社会の秩序も、このような民間宗教の行事の中で反映されている。

## 派遣後の研究発表の予定

2010年10月22日に、上海交通大学で開催された第15回大阪大学-上海交通大学学術交流セミナー（歴史分科会）で、今回派遣から得た研究成果を発表した。

発表記録は、<http://history.sjtu.edu.cn/show.asp?id=113>を参照。